

ふう え  
封じ江 (藤江)

むかしの藤江は、海岸に沿って今の旧道があり、その道路沿いの三丁・上之山・西之宮に少し家が建っていただけでした。そして、須賀川の川口である須賀から現在の<sup>かみはざま</sup>上廻間・<sup>しもはざま</sup>下廻間のあたりは、「江崎」と呼ばれる半島状の洲で、ちようど衣浦の入江を封じるかのように海に向かつて長く突き出していました。そのため、そのあたりの地名が、封じ江から「藤江」となったという言い伝えがあります。



▲ むかしの<sup>ふうえ</sup>藤江の<sup>いりえ</sup>入江 (新美忠治<sup>にいみちゆうじ</sup>氏<sup>し</sup>画<sup>が</sup>)

やがて、この江崎を中心（えさき ちゅうしん）に両側（りょうがわ）の入江（いりえ）を封（ふう）じて埋（う）め立（た）てが進（すす）み、そこ（ひと）に人（ひと）が移（うつ）り住（す）んで（そんらく ひろ）村落（むら）が広（ひろ）がりました。この地（ち）に移（い）住（じゆう）した人（ひと）たちは、横根村（よこねむら）の人（ひと）たち（ひと）だ（ひと）った（ひと）とい（ひと）います。境川（さかいがわ）からは、横根村（よこねむら）の人（ひと）たち（ひと）だ（ひと）った（ひと）とい（ひと）います。境川（さかいがわ）から流（なが）れ出（で）た土砂（どしゃ）が、次第（しだい）に衣浦湾（きぬうらわん）北（ほく）部（ぶ）の豊明（とよあけ）・大府（おおぶ）あたり（あた）りの海（うみ）を埋（う）めてい（い）き、漁業（ぎょぎよう）や塩焼（しおや）きを（えんがんぎよみん）して（うみ）いた（うみ）沿岸（えんがんぎよみん）漁民（うみ）が、海（うみ）を求（もと）めて南（みなみ）へ移（い）住（じゆう）して（うみ）きた（うみ）のだ（うみ）さ（うみ）そう（うみ）です。

横根（よこね）から来（き）た人（ひと）たちは、新（あたら）しい土地（とち）でも、氏神（うじがみ）の藤井大明神（ふじいだいみょうじん）をおまつり（おまつり）し（おまつり）ました。そして、横根（よこね）の藤井神社（ふじいじんじや）で使（つか）わな（めん）く（ゆずり）な（ゆずり）って（ゆずり）いた（ゆずり）面（めん）を讓（ゆずり）



り受（う）けて（う）きて、祭礼（さいれい）で舞（ま）う（ま）よう（ま）にな（ま）った（ま）のが、

▲ ふじえじんじや  
藤江神社

藤江神社のだんつく獅子舞いの起りだということ  
とです。

後、阿久比や三河からも人が移り住んで、戸数

もしいにふえました。江戸時代後期には、さ

らに海岸の埋め立てが進んで、新田が海に向か

って広がっていききました。

現在の衣浦湾は、両側から埋め立てが進んで、

すっきり封じられ、入江というよりは、まるで、

一筋の川のようになっています。